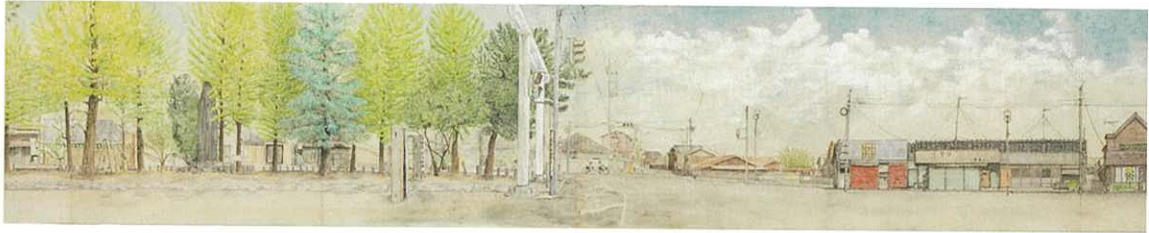




ことば

2023年月12月14日発行
公益財団法人 大川美術館
〒376-0043 桐生市小曾根町3-69



金原寿浩《桐生本町通絵図》（部分）2006-10年、水彩色鉛筆、インク・紙 20.0×2956.8cm

ことば 139

私は一軒一軒の店を描きながらそれは単なる建物ではなくそこで暮らし、商い、代々引き継がれ、又は商売替えしたり、新たに始めたり、終えたり、解体されたり全て違った時が刻まれている事を実感したのです。

（金原寿浩「桐生本町通絵図展」（桐生市有鄰館、2010年）の挨拶文より）

大川美術館では、2023年10月7日～12月3日の会期で企画展「桐生のアーティスト2023 KIRYU Days - 昨日の明日、そしてこれから」、特集展示「桐生のアーティスト大収穫祭」を開催しました。本欄では、本展をご覧いただいた高崎市タワー美術館・谷津淑恵氏、群馬県立館林美術館・熊谷ゆう子氏、桐生タイムス記者・裳崎昭子氏にそれぞれの視点からレビューのご執筆をお願いしました。ここに改めて謝意を表します。

「桐生のアーティスト2023」を訪れて

谷津 淑恵

「桐生のアーティスト2023」は、桐生を拠点に作品を制作するアーティストたちのグループ展である。2020年にスタートし今年で4回目の開催となる。今回のテーマは「時間」。サブタイトルには「KIRYU Days - 昨日の明日、そしてこれから」とあり、桐生での日々とこれからの、作家自身の「時間」で表現した作品が紹介されている。今回は「時間」の捉え方がさまざまな3名の作家の作品について感じたことを述べていきたい。

「アトリエ探しの為に訪れた桐生でのこぎり屋根工場に魅了され埼玉県から移住」した金原寿浩は、1994年に桐生市にアトリエを構え作家活動を本格化したという。2011年東日本大震災以降は津波や原発事故の被害を絵で表現し、「桐生のアーティスト2020」でも《夜の森哀歌 福島・富岡》、福島第一原発事故をモチーフにした《明日なき世界》などを展示した。今回出品している《桐生本町通絵図》は2006～2010年に制作された作品だ。桐生天満宮を拠点に直線の商店街を100分の1のスケールで描いた長さ30メートルの作品で、通りに面した左右の町並みをあわせると60メートルにも及ぶ大作となっている。大



金原寿浩 展示風景

きな作品のため、会期中4回に分けて展示を行っていたが、作品をすべて映した映像作品もあるため全貌をつかむことができる。映像は桐生天満宮からゆっくりと動きだし、桐生和紙に水彩色鉛筆で描かれた町並みを映し出す。薬局、魚屋、染物屋に混ざってピザ屋や紳士服チェーン店があるのが今時の地方都市らしい。60メートルの中には3年半の歳月が凝縮されている。その期間に閉店した店、変わらず開いている店もあれば代替わりしてリニューアルした店もあるだろう。店の近くには全く別の土地からやってきて桐生で暮らしている人もいるかもしれない。ゆったりとした時間が流れる本作は、繋がって、巡って、桐生だけでなく彼の地に住む誰かの物語も映し出しているかのようだ。作者は桐生という場を通し日々を生きる市井の人々を描く一方で、時間の流れに抗うことのない私たちに對し「そのままがいいのか」という疑問を投げかけているようにも見える。

私が展覧会に訪れた時、偶然桐生市内の高校生の団体と居合わせた。《桐生本町通絵図》を見る高校生も作品とどこかで繋がっているんだ、と感じた時、ゆっくりと流れていた時間が少し速まり、未来が近くなる気がした。



田島環 展示風景

アクアワークスという水彩絵の具を使った独自の技法で、時間の移り変わりを表現しているのは田島環。桐生市に生まれ、東京藝術大学を卒業した田島は、2000年代からアクアワークスによる作品制作を展開している。紙に絵の具を流しながら表面を薄い刀で線を引く。「イメージに出会うまで何度もこの作業を繰り返す」ことで偶然に導かれた複雑な色彩が画面を覆い、光に包まれる。白いひなげしがゆれる《コクリコ》、夕暮れ時だろうか、黄色から薄いオレンジ色のグラデーションが美しい《ガーデン》、《手放す》シリーズは近



フカツクミコ 展示風景

年田島が取り組んでいるテーマで、「軽くなりたい」気持ちからスタートしているという。刻まれた線と誘導によって、流した絵の具が出会った瞬間、作品はそれぞれの時間を歩み出し、鑑賞者はイメージを広げることができる。私は浮遊するクラゲになり原始の海を漂っている気もするし、藻が茂る海中の草原で光を探している気もする。田島は「いつか私たちがそこに帰る、美しく偉大な空。そして時を画面に刻む、私の試みの断片です」と語っている。刻まれたのは、人間の生命よりもはるかに長い、空や海が有する悠久の時間なのだろうか。

フカツクミコは桐生市の隣、みどり市の出身。桐生市で青春時代を過ごした後、多摩美術大学テキスタイルデザイン専攻で美術を学んだ。2011年より作家活動を本格始動し、イラストレーションを中心に活動している。出品作品はいずれも2022～23年に制作されたもので、作家の今を知ることができる展示だ。観葉植物、ランプシェード、レコードプレイヤーなど、お気に入りのものたちが描かれ、作品を通じて作家の感じたこと、思いをストレートに受け止めることができる。「渡良瀬」、《桐生三大市》などでは、縦横の糸が織りなし川や山を形づくる。「装飾性や図案のような抽象表現、配色のこだわりはテキスタイルの街で育ち無意識に培った何かが導いているのかもしれない」と作家が語るように、今まで過ごした時間が今のフカツクミコを作り上げている。私たちは彼女の自分史をのぞきながら、その中にある自分の好きなものを探し出す。まるで同じ時間を共有しているかのようだ。作品をみると少し懐かしく、ほっとするのはそのせいなのかもしれない。

(高崎市タワー美術館 事務次長)

「桐生のアーティスト2023」および 特集展示「桐生のアーティスト大収穫祭」を見て 熊谷 ゆう子

「桐生のアーティスト」は、桐生出身、あるいは桐生を拠点に活動するアーティストたちによるグループ展として2020年から始まり、今回で4回目の開催となる。初回はコロナ禍が始まった頃の開催だったからか見逃してしまっており残念に思っていたが、「桐生のアーティスト大収穫祭」と題した今回の特集展示では、これまでの同展に参加したアーティストの作品を展示しており、当時の様子を垣間見ることができた。コロナ禍の暗い雰囲気を跳ね除けるような2021年の「Kiryu POP」がこのシリーズ展との出会いだったが、これまで大川美術館に抱いていたモダンアートを展示する落ち着いた雰囲気の美術館というイメージが覆されるような強いインパクトを感じたことが印象に残っており、翌年も楽しみに伺った記憶が作品を見ていて蘇った。特集展示では、今年で生誕200年を迎えた日本最初の女性写真師である島隆の貴重な写真作品の展示や、桐生のアーティストを語る上で外すことのできないオノサト・トシノブ、新井淳一、石内都などの作品も並んでおり、若手アーティストたちへと続く桐生の充実したアートの流れをあらためて見ることができる展示となっていた。



特集展示「桐生のアーティスト大収穫祭」 展示風景

今回の「桐生のアーティスト」は「KIRYU Days 昨日の明日、そしてこれから」と題している。「時間」というテーマは幅広く解釈できるが、“私的な「時間」のなかでの今の桐生を眺め、思索を重ねて生まれた作品”とのことで、テーマについて考えながら、7人のアーティストによる展示を拝見した。

藤井宜人の展示は、透明感のある色彩で女性を描いた絵画とパステル系やグレーに塗られた単色の絵画が点在した空間となっている。女性像には藤井が近年行っている手法で線を加える行程や、上から色を重ねる行程を経て、時代により移り変わる現代の女性のイメージを見せているという。色を重ねた作品に暗い色が多いのは、女性を取り巻く複雑な状況を表しているのかもしれない。

フカツタミコの柔らかい色彩と素朴な筆致による絵画は、織物や陶器などの図案を思わせる単純化されたモチーフに安らぎを感じる作品でもある。本展のために制作されたという4点の新作には、桐生から離れてしばらく経ったことであらためて感じる自然や文化のイメージが画面中に楽しみに描かれており、フカツの中に息づく織物の街の記憶と時間を感じさせてくれた。

田島環の展示は、様々な色やサイズの作品により空間が構成されている。鮮やかな絵の具の濃淡が動きを作る画面には、作品によって余白や傷、異なる色彩があり、抽象的でありながら、画面中に物語を感じることができる。アクアワークスという、絵具を水で流しながら画面を作る技法を用いており、イメージに出会うまで何度も作業を繰り返すという、時間を重ねて生み出された作品であった。

片山真理と木暮伸也は二人合わせた形での展示空間を構成しており、タイプの異なる写真作品を制作するアーティスト同士による二人展のようになっていた。自身の身体を撮影した作品を展示する片山真理は、学生時代に大川美術館に通い、作者への思いを馳せながら過ごした時間があっただという。今や国内外で活躍するアーティストとなり、展示する側として戻ってきた片山の作品は、今度は次の世代のアーティストへ刺激を与えて行くのだろう。木暮伸也の展示では、大川美術館のコレクションから画家・横堀角次郎の作品に注目して制作したという新作が興味深かった。赤外線撮影により、絵の下に描かれた別の絵の痕跡をとらえることができたというもので、横堀の作品と並べて展示している。美術館での撮影業務も行う木暮ならではの着眼点と思われるが、群馬の近代美術ではおなじみの画家と現代のアーティストとの邂逅を楽しませてもらった。

父の営む天然染色研究所で染色を探求する田島



片山真理、木暮伸也 展示風景

史朗の展示では、糸による多彩な表現を見ることができ。階段横の吹き抜けに展開されたインスタレーション作品は、糸が集まる部分を正面から見ると「絶望」と白抜きされている。しかし、「絶」の文字は「糸」と「色」が離れているようにも見え、染色アーティストの作品と考えると後者のようにも思えてくるが、タイトルは《みたいものしかみない》と意味深である。アルファベットを刺繍した作品も、その言葉の意味や、糸の色、大量に刺されたピンなどから、様々な解釈が可能である。染料から育てて制作する田島の作品には完成までに多くの時間を要していると思われるが、作品も時間をかけて考察したくなる表現であった。

最後の金原寿浩の展示では、展示室の両壁一杯に展開されている《桐生本町通絵図》に圧倒される。全部で60mにもなる作品のため、4期に分けて展示替えを行うとのことだが、全体を見ることのできる動画も上映している。画面では天候や時間、季節も移り変わり、制作に費やした3年半の日々の記憶も刻まれている。完成から年月が経ち、描かれた店や建物の中には無くなったり、新たに建てられたりと街並みも変わってきているそうだが、金原によって写し取られた当時の街の景色はいつまでも作品の中にあり続ける。田中館長によると今回のテーマは金原の作品をきっかけに考えたとのことだが、この長い商店街の過去や未来、そこで過ごす人々も含め、様々な「時間」に思いを巡らせるきっかけとなる作品であった。

桐生では、有隣館でのアートイベントなども開催されており、活動するアーティストが多い印象がある。「桐生のアーティスト」ではどのようなテーマで、どのアーティストの展示を見ることができるのか、今後も楽しみにしている。

(群馬県立館林美術館 学芸員)

時間の乗り物

蓑崎 昭子

前世紀の1989年、平成元年4月に開館した大川美術館との付き合いも、おもえば長くなった。経済人にして稀代のコレクター大川栄二が「有難い故郷に美術館をつくる」「観光地ではないからこそ、心の洗濯場となる、常設主体の美の館にする」と宣言して以来、桐生市役所内に置かれた準備室にも足しげく通って構想や進捗状況などを聞いた。氏のとどまるところを知らない激烈な多弁雄弁に圧倒され続けて、そのコレクションの中核、つまり大川の神髄に鎮座するのがあの静謐な、詩的な哀しみをたたえた作品群であるとは驚きであり、得心でもあり。そしてハコ、入れ物は人の暮らした時間の痕跡を留める既存の建物をリノベーションするという、先駆的な再生思想であった。

開館30周年記念の一連の松本竣介展を終えた2020年にスタートした企画が「桐生のアーティスト」展である。大川亡き後もこの地に根差す、人肌のぬくもりを感じる美術館として、ゆかりの作家たちを個展形式で紹介するという試みは真つながら、全員が同時代に生きて一堂の集合写真が撮れば作品を前に直接インタビューもできるという喜ばしくもスリリングな体験をさせてもらった。ところがまさかのコロナ禍、開催にはこぎつけたものの、予定されていたアーティストトークは中途打ち切りに。現存作家展なのに会えるのは作品のみという宙ぶらりんな状況に遭遇して、辛さ暗さやりきれない不安のときにこそ、絵や彫刻に向き合う静かな時間が必要なのだと思い知った。

打って変わって2021年のテーマは「POP」。22年は「Natural Mind and Natural Color」。現在23年は「KIRYU Days」、つまり桐生における「時間」である。そして特集展示として「桐生のアーティスト大収穫祭」が生まれ、過去3年間の出品作家たちもこれに加わった。

「大収穫祭」、疫病や災害、気候変動を乗り越え、幸い戦禍に遭うことなく、生き埋めのまま忘れ去られることもなく、大川美術館の大展示室と続く小部屋に出現することが叶った作品たちを寿ぐ。

その嚆矢に据えられたのが、島隆（しま・りゅう 1823～99年）だ。江戸時代末に名乗りを上げた日

本女性初の写真師は、ここ桐生の生まれ。生誕200年の記念すべき年に、まさに錦を飾ることになった。

「葉の花の咲く、はたちのころ、おばあちゃんは馬に乗って江戸に出て行ったそうです」。孫にあたる島勝二がうたうように語ったものだ。寺子屋の女師匠に学んだ聡明な惣領娘は江戸一橋家の祐筆に上がり、4歳下の島霞谷と出会う。霞谷は栃木出身、江戸に出て椿椿山の画塾に学び、油絵、写真、のちには活字製造など西洋文明に食らいつく。幕府洋学研究機関の開成所に入って川上冬涯や高橋由一らと研究をともにした。アーティストというよりテクノクラートだ。

隆は夫とともに化学的知識を学び英語を勉強して、助手にとどまらず確かな写真術を身に付けて霞谷38歳の肖像をものした。「元治元年 写真師 島隆」の証の墨書は日本の女性第一号というだけでなく、世界初かもしれない。英国のジュリア・マーガレット・キャメロンと、ほぼ同時なのである。



島霞谷《コウモリ傘を持つ島隆》幕末～明治3年以前 個人蔵

その隆の姿がガラス湿板に残されていた。1998年に米国ロチェスターのビジュアルスタディワークショップで開催された「不完全な歴史—日本の女性写真家展」のために海を越え、コダック本社おひぎ元の研究機関の専門家によるプリントが、今回展示された「コウモリを持つ像」である。漆黒の深みと立体感、額装され照明の効いた白い壁に乗って一層際立ち、彼女のりりしさを増幅する。白シャツに無造作な袴、素足に雪駄。椅子とコウモリは舶来か。霞谷さんだって、かぼちゃを掲げて笑っている髷間のような姿を隆の手腕で留めているのだから、この夫妻の実験精神はただものではない。



特別出品：島隆—日本で最初の女性写真師 展示風景

霞谷が明治3年に急逝後、遺品類一切をもって帰郷した隆さんのおかげで、日本の美術史・写真史・印刷史は刷新された。洋画・日本画という分類はおろか、美術、写真という言葉も未だ、書画をたのしむ空間は陰影礼賛の床の間で、ミュージアムという権威もない時代を生きた隆である。桐生でも開業した自信満々の広告文を写真にした機知も驚きだが、近年に肖像写真5点が市内で発見され、今展で初公開された。明治の桐生の男たちの容貌を、小さく硬質なガラスの上に確かめようと屈み込む、時空を超えた体感に震える。

おもえば記憶の時間とはひとつつながりの連続体というよりは回想したりフラッシュバックしたり刹那の断面であって、アナログよりむしろデジタル、動画より写真に近い。

島隆コーナーに続くのは一気に昭和以降の作品群となるが、多くはその言動や制作の現場を見知っている作家たちだ。作品とその姿がチカチカとオーバーラップするのも冥利かもしれない。そして展示構成編集の妙によって、たとえば新井淳一の重厚な《布目柄》と、石内都の写真《錦桜橋》、モノクロの2点に通底する、戦後の渡良瀬川大水害がもたらした転機を読み取るのも自由なのだ。



特集展示「桐生のアーティスト大収穫祭」展示風景
(展示風景の写真はすべて木暮伸也)

いま、わたしたちをまず迎えるのはオノサト・トシノブ 1959年の抽象画である。桐生の作家たちに大きな影響を与えた彼の「真昼の絵画」、赤と黒の大きなベタ丸に問われた視覚は、コレクション展示「秋の彩り」に癒され、西洋モダンアートに進み、松本竣介《街》が定位置から移動してあることに驚き、らせん階段で掛井五郎のピヨヨヨンにあいさつして「大収穫祭」へと降りてゆく。国破れて山河はあった時代から、山河が抱く地球すら危うい足元を確かめつつの迷宮めぐりの先が、7作家による「昨日の明日、そしてこれから」。最下部の展示室でぐるり《桐生本町通絵図》に囲まれると、いま、ここに、在る、という感覚を、再々再度、なめまわすことになるのだろう。

(桐生タイムス 記者)

企画展「桐生のアーティスト 2023 KIRYU Days

—昨日の明日、そしてこれから—

アーティストトーク報告

企画展会期中、下記の日程で展示室にて7名の出品作家によるアーティストトークを開催しました。
(各日 14:00 ~ 15:00)

10月14日(土) 藤井 宜人

10月21日(土) 田島 環

10月28日(土) フカツクミコ

11月4日(土) 金原 寿浩

11月11日(土) 田島 史朗

11月18日(土) 木暮 伸也

11月25日(土) 片山 真理

【研究ノート】

曾宮一念による松本竣介宛書簡②

小此木美代子

前号138号では、1936年8月25日付、1936年9月17日付、1936年10月4日付、(おそらく1936年)10月7日付、1936年11月8日付の5通を紹介した。

本号では、1937年3月31日付の曾宮夫人代筆の一通につづき、1937年の4月に、竣介に宛て発信された4通を紹介する。

前年より体調のすぐれなかった曾宮は1937年は3月頃から、腰痛と全身衰弱により入院生活を送っていた。しかし4月中旬頃になると体調のよい日も続くようになり、そうした時間に『雑記帳』発刊以

来2本目のエッセイ「里謡自慢」(1937年6月1日発行)の執筆に向かっている。

いっぽう俊介は引き続き『雑記帳』の充実を奔走していた。そのなかで俊介夫妻は不幸に見舞われる。1937年4月4日、予定よりも早く生まれた長男・晉が出生の翌日に亡くなってしまふのである。この「断腸の思い」を俊介は1937年4月7日の日付で日記[※]に綴っている。

「彗星の如き生命 晉。」とはじまる2頁にわたる日記の文章には、晉の生誕から葬儀までの時間が綴られた。後半には、「一当分の間 空虚さに苦しめられよう。だが、本当に子供を考へるならば、その意志を自分の中に育て、行くことをしなければならぬ。」と、俊介は書いている。

俊介夫妻は、5月に刊行予定であった『雑記帳』第8号は臨時休刊することにした。今、「無理な編集をして中途半端な雑誌を作るよりは六月号に万全を期した方が、編集者として良心のある方法」と述べ、同年5月1日に『総合工房通信No.1』を発行し読者に発信した。同紙面では「雑記帳」の意義を改めて広く読者に伝えるものとなった。「激しい悲しみ」から立ち上がろうとする若い夫妻の力強い意志をも感じられるものであった。

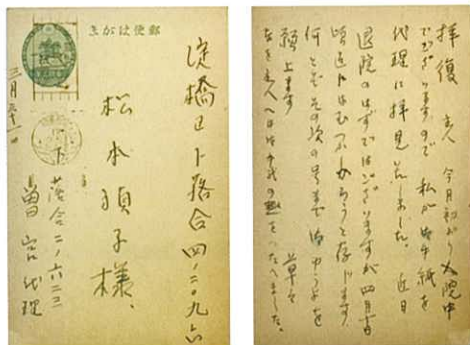
1937年4月中旬までの曾宮から俊介に宛てた書簡の中には、『雑記帳』への執筆の連絡のなかに夫妻をさりげなく気遣う様子が随所にうかがえる。なお、『雑記帳』は休刊後の第8号(1937年6月)から、価格は据え置き頁数を百頁としエッセイ、デッサンのさらなる充実がはかられた。そのはじめの号にここにやり取りされた曾宮のエッセイ「里謡自慢」は掲載された。

※『無辜の絵画』(編・広島市現代美術館、国書刊行会、2020年)所収の長門佐季「一九三七年の松本俊介―未刊行の「日記」より」論考中に日記が翻刻されている。

(当館学芸員)

【松本禎子 宛 1937.3.31 消印】

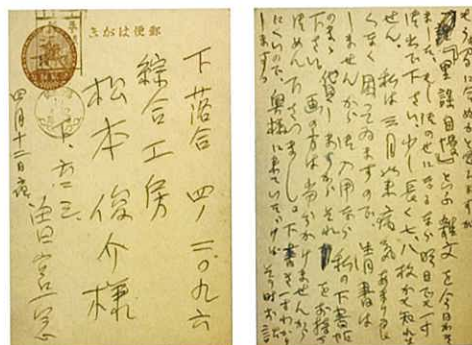
曾宮代理



拝復 主人 今月初より入院中
でございますので 私が御手紙を
代理に拝見いたしました。近日
退院のはずではございますが四月十日
頃迄にはむつかしからうと存じます。
何とぞその次の号まで御ゆうよを
願上ます 草々
なを主人へは御手紙[※]の趣をつたへました。

※同日の曾宮の日記(曾宮の「昭和十二年三月初旬 同六月末」日記による。今回曾宮の「日記」と記したものは、すべてこの日記の記述を参照した)の受信欄には、松本禎子の名が記され、続いて発信欄にも同じく松本禎子の名がある。以後続くこの月の書簡の存在から、『雑記帳』への執筆依頼であったらうと推測される。

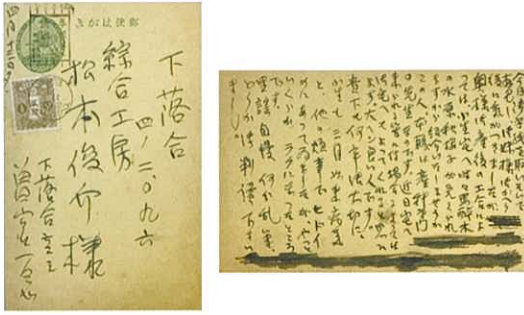
【総合工房 松本俊介 宛 1937.4.12 消印】



もう一寸間に合ぬかと思ひますが、
『里謡自慢』といふ雑文[※]を今日かき
ました、もし御のせになるなら明日でも一寸
御出で下さい。少し長く七、八枚かも知れ
せん。私は三月以来病氣あまり良
くなく困つてゐますので、清書は
しませんから御入用なら私の下書帖
のみ、貸しますからそれをお持ち
下さい。画の方は当分かけませんから
御めん下さいまし。下書き一寸わかり
にくいので、奥様に來ていたゞけばその時お話
します。

※同日の曾宮の日記には、この日の天候は「曇なれども爽気」と書き出され、「午後 雑筆『里謡自慢』をかく。松本氏の「雑記帳」の原稿にするつもり。」とあり、発信欄には、松本俊介の名が記されていた。この書簡のことだろう。療養中の気分がよい日に執筆された「里謡自慢」は、東京下町生まれの曾宮が、少年期より田舎への旅によく出かけていた回想からはじまる。「八木節は「おけさ」以来の感動」等々、これまで旅先で出会ってきた「野の唄」の思い出の数々が里謡好きであった曾宮の生き生きとした描写で綴られた。中盤には、ふたたび「八木節」について、当時病床で耽読していた寺田寅彦の随筆から、「柿の種」に触れて紹介している。土地の人の声色もまた「野の唄」の良さであるとし、自身が身を置く画の社会以上に無名性が必要と締めくくった。曾宮の好んだ「野の唄」をとりあげながら、俊介が希求した「総合された雰囲気」『総合工房通信No.1』(1937年5月1日)が滲むようなエッセイであった。

【総合工房 松本俊介 宛 1937.4.13 消印】



今日御手紙を取りそいで
 拝見し、御妹様^{※1} 御かへり
 後に気がつきましたが、
 奥様御サンゴの工合^{※2} によ
 つては、小生宅へ時々馬酔木
 の水原秋桜子^{※3} が見えられ
 ますから紹介いたしませうか
 この人、本職は産科専門
 の先生なのです。近日宅へ
 来られる筈に付場合によつては
 御宅へもよつてくれると思ひ
 ます。大ヘン良い人です。
 貴下も何卒御大切に、
 小生も三月以来病氣
 と、他の煩事でヒドイ
 めにあつてゐましたが、やつと
 いくらか ラクになつたこと
 です。
 里謡自慢何分乱筆。
 どうかご判読下さいまし。

※1 同日の曾宮の日記によれば「この日の午後松本氏の妹泰子君
 きたので原稿を帳面のまゝ渡す。」と記述あり。泰子は、妻・禎子
 の長妹。1936年に禎子と結婚後、母・恒、妹・栄子とともに竣介、
 禎子夫妻と暮らしていた。1938年7月に病没する。

※2 竣介夫妻には、4月4日に長男・晉が誕生したが翌日亡くなる。
 この文面から推測するに、泰子の来訪を通じて曾宮はこのこと
 を知ったと思われる。

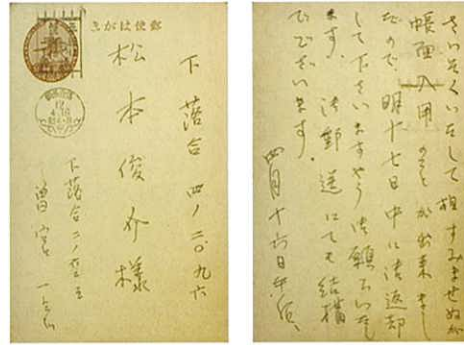
※3 水原秋桜子(1892-1981)は、大正、昭和の俳人で医師。この頃、
 曾宮と頻りに交流していた。『馬酔木』(創刊1928年7月)は俳句雑誌。
 水原を中心に若い同人たちが集まり新しい時代の俳句を発表したり、
 自由に意見を述べる紙面となっていた。『馬酔木』への曾宮の執筆
 は下記のとおりに。

「春の花の雑誌」(No.178、1937年3月)

「作画初歩(1) - (7)」(No.181-187、1937年6 - 12月)

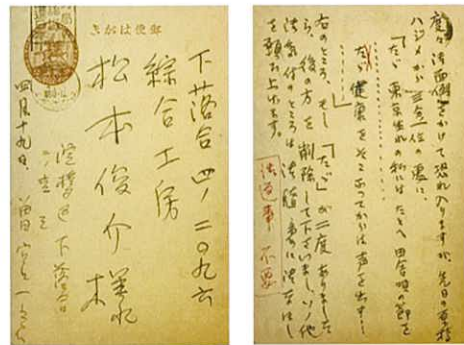
「夕ばえ」(No.217、1940年6月)

【松本俊介 宛 1937.4.16 消印】



さいそくいたして相すみませぬが
 帳面入用のことが出来まし
 たので、明十七日中に御返却
 して下さいますやう御願ひいたし
 ます。御郵送にても結構
 でございます。
 四月十六日午後、

【総合工房 松本俊介 宛 1937.4.19 消印】



度々御面倒をかけて恐れ入りますが、先日の原稿[※]
 ハジメから三分ノ一位の處に、

「たゞ東京生れの私にはたとへ田舎唄の節を

~~~~~  
 たゞ健康をそこなつてからは声を出す、  
 ~~~~~」

右のところ、もし「たゞ」が二度ありました
 ら、後の方を削除して下さいまし、ソノ他
 御気付のところは御随意に御なほし
 を願ひ上げます。

御返事 不要

※引き続き「里謡自慢」のこと。この日の曾宮の日記には、折しも「宮
 崎地方の里謡をラジオできく、おはら節に似たものと、伊勢音頭
 の変形。」と書きつけてある。原稿修正の要件を伝えたのち、赤字を
 さらに枠で囲んで「御返事 不要」と送ったのは、竣介夫妻を氣遣
 う曾宮の優しさのあらわれに思われる。(次号へつづく)